

漢方の「科学的根拠」探究

症状、投薬などデータ解析

サイエンス

2千年以上の歴史をもつとされる漢方。西洋医学に東洋医学を加えた「統合医療」の可能性を探る厚生労働省のチームが発足し、あらためて注目が集まる。漢方活用に関する厚労省研究班(班長・黒岩祐治国際医療福祉大学教授)は2月、経験の蓄積から科学的証拠に基づく医療への転換を図るべきだとの提言を発表。漢方医の「匠(たくみ)の技」の正体を明らかにする試みが始まっている。

▽データ化する

東京都新宿区の慶応大病院。渡辺賢治漢方医学センター長に促されて問診用端末に向かい合うと、モニターに質問が表示された。食や睡眠などの生活習慣に加え、冷え、しびれなどの症状を部位ごとに聞かれ、その主観的な強度を0~100の数値で入力していく。

約200の問診情報に医師が下した診断や漢方製剤の処方などを加え、個人が特定される情報を除いた1千項目以上のデータを1人分として、これまでのべ5千人分以上のデータが蓄積されてきた。

「漢方は、患者の体質などに合わせて治療法を調整する個別化医療だ」と渡辺センター長は解説する。目の前の患者を、体質や生活環境などが似た過去の患者たちと比較しながら、見立てと治療法を選択する。こんな方法論をコンピューターで再構成するには、まず症状、診断、治療をくまなくデータ化することが求められる。

▽数式に乗せる

こうして集めたデータの解析を担うのは、東京大医科学研究所DNA情報解析分野の宮野悟教授、井元清哉准教授らだ。まず取り組んだのは、初診の患者が、慶大病院式の漢方で症状が改善する確率の計算。確率が高ければ治療に入り、低

ければ別の方法がないか模索するなど、治療方針決定の一助になることが期待されている。

「足の冷え」を例にとれば、120近い問診項目から、冷えと関係が深い35項目を数学的な方法で選抜。これらの項目について対象の患者と回答傾向が似た別の患者の治療記録を比較し、改善が見込めるか判断する。ここで治療効果が期待できるとされた人の91%が、実際に3カ月後の症状改善がみられたという。

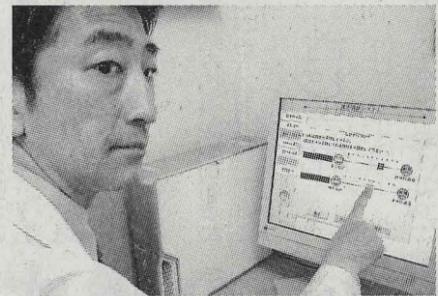
問診データから診断をつける試みも行った。漢方医学では体質や症状を総合して「証」という診断をつけるが、線が細い「虚証」と体格のいい「実証」を計算で判別すると、実際に医師がつけた判断と87%一致。医師の診断支援につながるかもしれない。

井元准教授は「漢方医学が数式に乗せられることが証明できた」と手応えを語っている。

▽規模拡大へ

慶大病院単独で行っていたこの研究は本年度から、全国10施設に拡大する。より多くのデータを集めれば予測の精度アップが見込めるためだ。

患者によるシステム活用も視野に入れている。渡辺センター長は「患者の医療情報を患者に還元したい。現在も自分自身の治療経過を来院時に確認することはできるが、将来的には携帯端末から自分に合った治療を探せるような仕組みにしていければ」と話している。



慶応大病院に設置された漢方問診システムを操作する渡辺賢治漢方医学センター長(東京都新宿区)

2007年にリニューアルした東京都の区立千代田図書館は、ビジネスにも使いやすい設備、「コンシェルジュ」の配置など、従来の図書館像を打ち破り話題となった。

公立図書館を改革 責任者が日々つづる

「図書館の発展のためには、サービスの有料化も必要だと思います」と話す柳与志夫さん(東京都港区)



「いまひとつのこと失敗した」ともあるが、常にチャレンジしていることが大事」と話すのは、当時、千代田区に向して新装開館の陣頭指揮をとった国立国会図書館課長の柳与志夫さん。その日々をつづった新著「千代田図書館とは何か」(ポット出版)は、現職

の図書館官僚としての「問題提起の書」でもあるという。国会図書館で企画や調査研究などのキャリアを積んできた柳さんには常々、公立図書館への疑問があった。「ベーストセラーを何十冊も買いそろえ、『無料貸本屋』をやめさ

れている。根本的に変える必要があるのでは」04年に旧千代田図書館に赴き、貸し出し中心の業務に安住する館員の「知的怠惰」を目の当たりに。そこで、管理運営を外部の団体に代行させる指定管理者制度の導入を推進した。民間の知恵を生かした結果、平日夜10時までの開館やネット環境の充実、区内の古書街と連携して古書の展示販売といった新サービスが生まれたという。

ただ、手放して同制度を奨励するわけではない。ニーズに応じた柔軟な運営や専門スタッフの確保などの利点を挙げながらも「大半の図書館では経費削減だけを目的とした

「官から民への、曲がり角」の時代に公共図書館の果たす役割とは。「情報や知識を整理し、誰もが公平にアクセスできるような基盤として、人が集まり新たな知を生み出す場」も必要。その面では図書館に一日の長があると思

「見せかけの導入が目につき、サービス向上に結びついていない」と指摘。遠因として、自治体の理念なき図書館政策を挙げた。

小学1年生の日常を描く

作家・万城目さんの新作

デビュー作「鴨川ホルモ」で、犬の言葉を理解できる「男あをによし」「プリンセス・トヨトミ」と、奇想天外かつ壮大な作風で親しまれている作家万城目さん。



「新書というボリュームもちよとうと良かった。今だからよそ書けた作品」と話す万城目学さん(東京都千代田区)

「子どもたちの日常を描くのがマドリ」は「子どもたちの時間の流

れや、身の回りの空気感を書きたかった」と万城目さん。幼いころの記憶をあるだけつぎ込み、実際に小学校を訪ねて1年生の教室取材。「せわしなや、喧嘩けんそう、元気がや突拍子のなさを感じてきました」

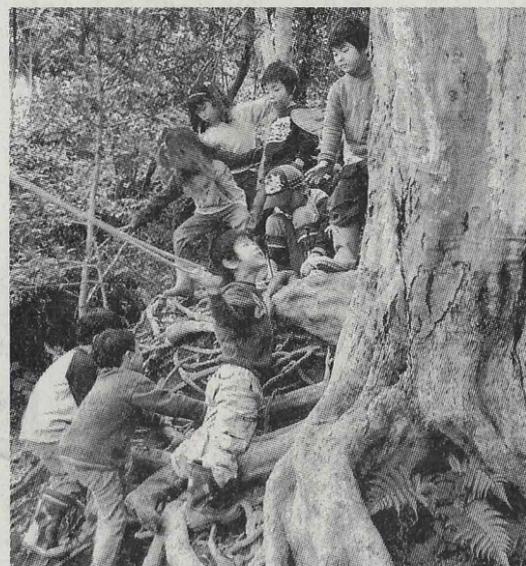
里山保育の子どもたち

宮崎 栄樹

2007年にテレビ放送されたドキュメンタリー番組「里山保育が子どもを変える」で、1999年から木更津社会館保育園が実践する「里山保育」が紹介された。

実績否定の末の試み

「子どもが行く！」も出版され、私どもの試みは世間に広く知られていた。里山保育は、有名なところとして始めたのではない。38年創立の社会館保育園は、全面的な保育方針の変革を2回試みた。3度目は99年、私が、自らの20年間の実績を否定したものだ。



森の木は、子どもたちの秘密基地(岡本央氏撮影)

EDUCATION

小学生のための体づくり紹介

歩行開発研究所発行「体づくり運動」の研究をされている歩行開発研究所(大阪府茨木市)は、子どもの成長・発達に必要な体づくり運動を分かりやすく紹介した「小学生のための元気な体をつくる運動」写真」を発売した。

著者は同研究所主任研究員の岡本香代子さんと、看護学校非常勤講師の港行

